

名古屋城及び周囲の動植物誌

高崎 保郎

1. はじめに

昭和 34 年開府 350 年を迎え、空襲で消失した本丸の再建を祝おうとしていた矢先、かの伊勢湾台風による大災害によりそれは潰えた。それから早くも 50 年が経過し 400 年の節目になった。折から来年 2010 年には愛知・名古屋で COP10 (生物多様性条約第 10 回締約国会議) が開催される。その関連事業として名古屋市が立ち上げた環境省支援による「名古屋ため池生き物いきいき計画事業」により、市内 10 ケ所のため池の生物相調査と外来生物除去をすることになり、名古屋城壕もその対象の一つである。本会は本事業推進者の一員である。外堀は 400 年前の築造以来底泥はそのままと言われ、底泥の珪藻と花粉分析調査と埋没オニバス及びその他の水草の種子の揚収発芽実験も計画されている。

昨今の自然観察ブームは、ややもすると現況のみに目を奪われ、生物分布の重要要素である歴史性に注目しない傾向があるやに見受けられる。本計画の着想も、かつてオニバス始め各種水生植物が存在したという記録があつてのことである。堀の水草相の半世紀に亘る変遷については、既に浜島繁隆氏が本誌 No24 (1996) で書かれている。

今更何で死の水域に等しい名古屋城外堀の生物調査なの？ という気がしないでもないが、今回の市事業に資することも念頭に、名古屋城とその周囲の半世紀前からの動植物相と環境の概要を公にするものである。

2. 名古屋城とその周囲の自然的環境の移り変わり

名古屋城とその周囲を自然的視野で大別すると次の様になる。

- ① 全周を外堀で囲まれた城郭内部
- ② 水堀である外堀
- ③ 外堀南側から離れて存在する南と東にさらに張り巡らされた南外堀・東外堀
- ④ 外堀南側と南外堀の間の広場である三之丸郭内

この 4 地域の戦後 (調査採集は昭和 22 (1947) 年以降) の自然的な環境の変遷を見てみよう。

(1) 城郭内

敗戦により城整備の余裕は全く無く、全域に亘り草本が生い茂り、カシ類、エノキを含む植樹も自然な林相を成していた。世間では荒廃と言うが我々には好ましい状態であった。北西側の深井丸広場は草原で直翹目の天国であった。東半分を占める旧歩兵第 6 連隊の敷地の兵舎は名古屋大学本部後に学生援護会学生会館となりこの辺りも同様な状態であった。隣の夏場所を行う現愛知県体育館の敷地のその頃の状況は記憶にない。

昭和 22 年の入場料 20 銭、昭和 24 年は 2 円、昭和 25 年には 10 円となり、値上がりと共に除々

に城内の下草は刈られ不要とされた灌木は伐採され、柵が出来、立入禁止区域が増え、無味乾燥な庭園化して来て今日に至っている。立木の間隔は空き現在林状を成すのは二之丸庭園の一部の常緑広葉樹林だけである。

(2)外堀（水堀）

水のある部分の広さは、7,500m²と言われ、給水は僅かな自噴井戸水と以前は庄内川から、現在は工業用水に依っているとのことである。

かつては堀の北東部は広範にヨシ、ハス等抽水植物に覆われていたが、現在は縮小し、ヨシ群落しか見られない。昭和29年頃には一部水田もあったらしい。1969年頃までは豊富であった浮葉・沈水植物は1982年頃には減少しつつあり、現在では絶滅状態である。

(3)南外堀・東外堀

中区丸の内の東西に走る南外堀通りと三の丸の官庁街に挟まれた掘割と土堤である。東端の東区泉で直角に北へ折れ、東区白壁の県立明和高校西北の土居下まで掘割が続く。この掘割内を西端堀川まで名鉄瀬戸線（所謂セト電）が走っていた。自然環境としては重要な本町橋から東の大津橋に至る部分はクズ、カラムシ等の草本が著しく繁茂し今は立入り難くなっている。この部分はヒメボタルの多産地として有名になったところである。

戦前はこの部分に娯楽園という小動物園が線路脇にあり、クマやサルが居たことを知る人は今や少なからう。昭和22・23年頃にこの掘割内は食料確保のため耕地になっており、水田にはオタマジャクシ、細流にはフナが居た。この頃は外堀陸地部分も国有地だろうが史跡だろうがお構いなく食うために耕地化されていた。

この部分の土堤の中程に、僅かに低くなった所があり、ここから大雨後には歩道に雨水が流出し大量のミミズが水の消えた後にへい死するのを常とする。この現象の原因は次による。進駐軍が現郵政公社名古屋支店ビルを病院として接收しており、現官庁街にあった宿舎を遠廻りせずに行き来出来るよう土堤を切りくずし、セト電を横切り一直線に道をつけたためである。後に土盛りし外見上修復されたが何百年も前に築造され硬く固まった土堤では無い柔弱な構造のため生じた自然現象を後遺症として今も見るのである。

(4)三之丸郭内

名古屋城外ではあるが樹林の多いところで、戦後しばらくの間は城と一体となった自然地帯であった。特に旧第3師団司令部（当時調達局、現水資源開発公団）敷地内のカシ類にはクワガタムシ類、カブトムシ類が多産した。もう一つのポイントは現護国神社で今よりも樹木に富んでいた記憶である。

以上4区画について述べたが、名古屋城の自然を考える際には、その南部の南外堀から東の土居下（現名鉄東大手駅）に至る地域も含めて考察する必要を認める。

生物部の調査に先立つ昭和 22(1947)年から足を運んでいた。中学時代であるから家の近くである名古屋城がメインフィールドであった。1940 年代後半で特筆されるのは、城とその周囲に本格的な流水域が存在しないのに、ハグロトンボ、キイロサナエのような流水性種が採集されていることである。特にハグロトンボは城内に多産し、つい先頃まで仇敵であったアメリカ兵がタモを貸せと言って採ってくれたことも忘れられない。当時外堀東北部付近にあったかもしれない小流、前述南外堀掘割内の細流或いは北方の堀川上流(昔は大幸川とも称していたらしい)で発生したものであろうか。次いでオグマサナエ、フタスジサナエである。両種が発生至適な池沼は近傍に当時でも存在しなかったと考えられる。両種共移動分散性に乏しい。だとするとやはり外堀東北部か南外堀掘割の止水域の可能性がある。

外堀東北部はヨシ、ハスを主体とする抽水植物が当時は広範囲に分布し沼沢状を呈し、わずかではあるがアオヤンマを産した。現在県準絶滅危惧種であるトラフトンボも多産し、この頃は市街地上空でもしばしば目撃された。

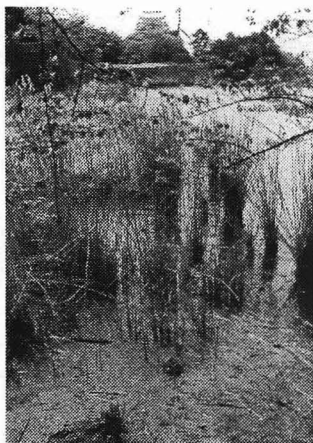


写真1 北東角から抽水植物群落越しに
西方を望む (2009年4月16日撮影)

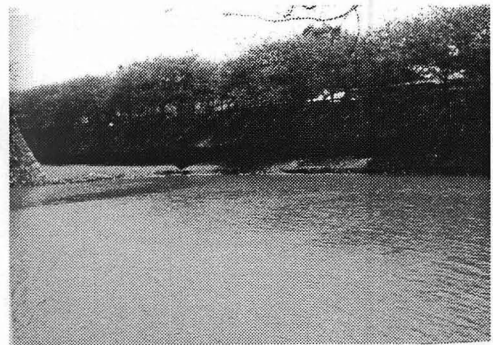


写真2 かつてイトトンボが多産した南西角
(1997年4月撮影)

イトトンボ類は1947年頃城内にも多く、1951年に多数のイトトンボを採集し寄生ミズダニの調査をしている。同年城内叢(草むら)で初めてベニイトトンボ3♂を採集した。1968年まで外堀及び城内で、クロイトトンボ、セスジイトトンボ、ムスジイトトンボの主要3種とベニイトトンボを毎年多数見ている。アジアイトトンボも普通で、オオアイトトンボ、モノサシトンボは稀であった。現在平地に広く産しイトトンボ優占種となったアオモンイトトンボはその頃は多くなかった。ベニイトトンボは太古から堀に産していたと考えるのが自然であるが、目立つ種であるのに1947年から1950年まで気付かなかったことは、他所から飛来したものが1951年以降急増した可能性も無くはない。本種の移動分散能力は高い。

1969年以降名古屋城を訪れることはなくなったので途中の経過は明らかでないが、現在堀、城

内共イトトンボ類、多産したチョウトンボとコフキトンボも見ることがなくなった。このことは、浜島(1996)の水生植物の変遷の記述と合致する。即ち「1967年、1969年はヨシ、ガガブタ、オニバスなどの浮葉植物が水面をおおい、濃尾平野の池沼に、一般的にみられる水生植物のほとんどの種が生育していた」が、「1995年では抽水植物を除く水生植物はほとんど姿を消していた」とされている。その中間の中部河川研究会(1983)の1982年の調査でも、外来沈水植物2種が加わった半面、既存の沈水5種、浮葉1種、浮遊2種が消えており絶滅の兆しが見えている。この調査で記録されたトンボは8種で、この時点では、クロイトトンボ、アジアイトトンボ、チョウトンボ、コフキトンボが残存している。

浮葉・沈水植物を主たる産卵基盤としている植物組織内産卵種などがそれを失い、休息・摂食場たる鶺鴒の首(敵を防ぐための堀の引き込み)の陸地部分や城内にあった叢(草むら)の公園整備による激減、捕食者であり水質悪化の一因ともなるコイの激増、水質悪化が絶滅の原因であろう。

2009年夏に確認できたのは、堀の北東又は南西端の抽水植物群落でのギンヤンマ、オオヤマトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボ(多)と、城内では比較的近年築造されたと思われる北西角のコンクリート張りの人工地でのショウジョウトンボ、マユタテアカネ、リスアカネのみであった。リスアカネは今回初めての発見で、この池で産卵も観察し、二之丸庭園の林縁でも常に見られた。前述市事業の同年7月・9月の調査ではこの他にウチワヤンマとアジアイトトンボを記録している。2008年北に隣接する名城公園のフラワープラザ前で、高飛するタカネトンボを目撃したが発生源は特定できない。リストには入れない。飛来と言え、数年前横地鋭典氏が東大手近くでムカシヤンマを目撃されたのは驚きである(未発表?)。1947年以降名古屋城とその周囲で記録された種を以下に掲げる。2000年の刊行物にこれ以外の若干種が掲載されているが、刊行物そのものに疑義があるのでここでは取り上げない。標本が現存するものについてはデータを掲げる。

「イトトンボ科」

ホソミイトトンボ 詳細不明

ベニイトトンボ 2♂ 22-VII-1951、1♂1♀ 28-IX-1968 少なくともこの年迄多産、高崎最終記録。その後1981年に複数目撃採集の記録(愛知県、1983)がありこれが最終であろう。

アオモンイトトンボ 1♂1♀ 19-VII-1968 多くなかった

アジアイトトンボ 1♂ 11-IX-1951 普通

クロイトトンボ 1♂ 19-VII-1968 多産した。現在は絶滅状態

ムスジイトトンボ 1♀ 15-IX-1967 多産した。現在は絶滅状態

セスジイトトンボ 1♂1♀ 28-IX-1968 多産した。現在は絶滅状態

「モノサシトンボ科」

モノサシトンボ 1ex. 目撃 22-VII-1951

「アオイトトンボ科」

オオアオイトトンボ 1♂ 2-VII-1953

「カワトンボ科」

ハグロトンボ 城内に多産したことは特筆される。1ex, 目撃 15-VII-1947 名古屋市中区丸の内一

丁目 (桜通)。城又は周囲からの飛来。飛距離 1.5Km

「サナエトンボ科」

キヒロサナエ 1♂ 15-V-1949 特筆すべき記録

フタスジサナエ 1♂ 29-IV-1949 特筆すべき記録

オグマサナエ 1♀ 3-V-1952 特筆すべき記録

ウチワヤンマ 1♀ 10-VII-1949

「ヤンマ科」

アオヤンマ 1♀目撃 5-VI-1958, 1♂ 18-VI-1978 (安藤尚採集)、1♀ 22-VI-1969 名古屋市

中区錦一丁目 2-25 堀からの飛来と推定される記録。飛距離 1.5Km

カトリヤンマ 詳細不明

ヤブヤンマ 1♂ 7-VI-1950 城内

ギンヤンマ 現存

クロスジギンヤンマ 詳細不明

「エゾトンボ科」

オオヤマトンボ 1♂ 20-VI-1951 現存

トラフトンボ 多産したが絶滅

「トンボ科」

シオカラトンボ 現存

シオヤトンボ 詳細不明

オオシオカラトンボ 1♂ 24-VI-1951 現存

コフキトンボ 1♂ 2-VI-1951 多産した。オビトンボ型は見ず。絶滅状態

ショウジョウトンボ 1♂ 10-VII-1949 城内の池でも発生。現存

ナツアカネ 1♀ 16-X-1951 1954年頃多産

アキアカネ 2♂ 16-X-1951 1954年頃多産

マユタテアカネ 1♂ 28-VIII-1951 現存

マイコアカネ 1♀ 3-XI-1954 標本所在不明

リスアカネ 6♂ 21-VIII-2009 城内で初発見。現存

キトンボ 1♂ 7-X-1951 (萩原真樹採集、高崎保管)

コシアキトンボ 現存最多

チョウトンボ 多産した。絶滅状態

ウスバキトンボ 現存

以上 35 種の他、城周囲でムカシヤンマ、タカネトンボの各一回の目撃がある。

イ. チョウ

1940年代後半から50年代始めにかけては、城内、三之丸郭内及び南外堀には樹木、草本が繁茂し、ゴマダラチョウ、ヒオドシチョウ、ルリタテハ、キタテハ、コムラサキが多産した。城南側外堀の土堤のカラタチ列植の下には刈り取られることが無いためウマノスズクサが多くジャコウアゲハが多産し、護国神社にも多かったことは特筆される。堀に群生するカラムシにはアカタテハが多く、現在でも多少見る。南外堀東端の三之丸庭園で、魚住泰弘氏(1967)が、オナガアゲハを目撃し、この界限で31種を確認したとしている。

1947年以降の記録を次に掲げる。34種であるが漏れがあると思料される。

「アゲハチョウ科」

ジャコウアゲハ 特筆に値する

アオスジアゲハ

ナミアゲハ

キアゲハ

モンキアゲハ 県庁本庁舎内に迷入

クロアゲハ

オナガアゲハ 魚住泰弘氏(1967)

カラスアゲハ

「シロチョウ科」

モンシロチョウ

スジグロシロチョウ

キタキチョウ

モンキチョウ

「シジミチョウ科」

ウラギンシジミ

ムラサキシジミ

ベニシジミ

ヤマトシジミ

ツバメシジミ

ルリシジミ

ウラナミシジミ

「タテハチョウ科」

テングチョウ

ヒメアカタテハ

アカタテハ

キタテハ 多産する

ヒオドシチョウ 多産した
ルリタテハ
ゴマダラチョウ 城と周囲の代表種であった。
コムラサキ 多産した
ヒメジャノメ
ヒカゲチョウ 多産した
サトキマダラヒカゲ
アサギマダラ
「セセリチョウ科」
キマダラセセリ
オオチャバネセセリ
イチモンジセセリ

ウ. 甲虫

甲虫は専門でやっていなかったので代表的な種についてだけ述べる。前述の如く 1940 年代後半

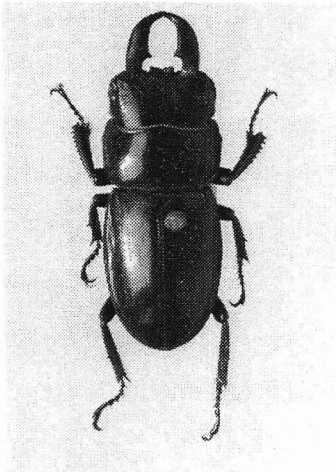


写真3 ヒラタクワガタ

(名古屋城 1949年6月11日採集)

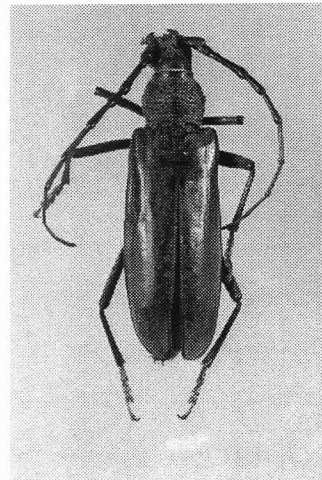


写真4 ミヤマカミキリ

(名古屋城 1948年7月28日採集)

から 50 年代初頭にかけて、城内と周囲ではヒラタクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタ、カブトムシを多産し、外堀堤ではコカブトムシを採った。カミキリムシもシロスジカミキリ、ウスバカミキリ、ミヤマカミキリ、クワカミキリ、ミドリカミキリ等を採集した。カミキリモドキ類、ケシキスイ類も多かった。

(3)植物

ア. 堀の水草

明和高校生物部植物班による報告 6 編がある。和名の統一が計られておらず、年代による違い

がある。同種異名の重複もあると思うが、それを承知の上で記述のまま一応全部列記しておく。正しくは至近の分類に基づく浜島(1996)を参照されたい。

(ア) 1950・51年調査の確認種

ガガブタ、フサモ、ヒシ、ヒメビシ、オニバス、カワホネ、ハス、マツモ、ウキクサ、トチカガミ、クロモ、サンショウモ、エビモ、フサタヌキモ、アシ、ガマ。学名は記されていない。他にオニバスの堀内分布状況と場所による大きさの違いについて述べた1編。

(イ) 1952年調査の確認種とその生態について述べる。

ヨシ、マコモ、ハス(白花)、ヒメガマ、コウホネ、オニバス(1年で発芽)、トチカガミ、ガガブタ、オニビシ、ヒメビシ、サンショウモ、ウキクサ、フサタヌキモ、マツモ、クロモ、ヤナギモ、イトヤナギモ、オオフサモ。学名は記されていない。周囲にミコシガヤを産することを付記。

(ウ) 1953年調査の確認種と越冬形態について述べる。

ヨシ、ヒメガマ、マコモ、ハス、コウホネ、カナダフサモ、オニバス、トチカガミ、ガガブタ、オニビシ、ヒメビシ、ウキクサ、アオウキクサ、サンショウモ、クロモ、マツモ、センニンモ、フサタヌキモ、ヤナギモ、その他としてフサモとマルバオモダカ、カナダフサモ以外は学名記載あり。

(エ) 1959年11月の大減水前の水草相とその分布域を浮遊生物班が報告している。分布図付。1953年調査種の範囲であるが、トリゲモを記録し非常に少ないと述べている。

(オ) 1971年調査 生物環境保全推進校指定に基づく調査の対象の一つとしてオニバスを取り上げ、城西側で減少、東端に多いとしている。

(カ) 1953年の調査で、脇田先生がフシマダラ(シオグサ科)を発見したとの記述がある。

イ. 名古屋城の蘚苔類

同定された29種を挙げている(1951年)。同定者は高木典雄先生である。

ウ. 名古屋城の陸上植物

顕花植物179種を記録している(1951年)。

(4) プランクトン

プランクトンの同定については京大天津臨湖実験所の指導を受け、日周変化や水質との関係も調査しており、10年程継続的に活動しているが、採集種をきちんとリストしていないので、何種を記録したかはっきりしない。

(5) 魚と甲殻類

一時期プランクトン班がプランクトンに並行して調査したが、報告の記述は簡略で自分達で同定しているので信憑性に危惧があるが次の種を記録している。このうちハスの多産は特異的で、丹羽弥先生も関心を持っておられたとのことである。プランクトン調査中オイカワと共に舟に頻繁に飛びこんできたと述べている。

ハス、オイカワ、フナ(キンブナ、ギンブナ、ゲンゴロウブナがいるとしている)、カマツカ、

イチモンジタナゴ、イシモロコ、タモロコ、ビリンゴ、ヨシノボリ (*G. similis*としている)、カムルチー、ナマズ、ウナギ、テナガエビ、アメリカザリガニ、モクズガニ (以上 1951 年の記録)。タナゴ、チョウセンブナ (以上 1952 年の追加記録)。コイの存否についてははっきりした記述がない。

(6)鳥

ア. 故高橋政雄、2号 1952. 2「名古屋城の鳥」

スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、トビ、セグロセキレイ、キセキレイ、ヒヨドリ、カワセミ、カイツブリ、キジバト、コカワラヒワ、ツバメ、コムクドリ、ノジコ、センダイムシクイ、コサメビタキ、サメビタキ、キビタキ、オオルリ、サンショウクイ、コマドリ、アオバズク、サシバ、コシアカツバメ、アカハラ、カッコウ、ヒバリ、シジュウカラ、アカモズ、チゴモズ、サンコウチョウ、メボソ、アカハラ、ホトトギス、ツツドリ、サシバ、イカル、ホオジロ、ウソ、ムクドリ、ビンズイ、ウグイス、セッカ、モズ、アオジ、ルリビタキ、コゲラ、オオアカゲラ、オオコノハズク、ノスリ、イカルチドリ、メジコ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、キクイタダキ、イソシギ、ハクセキレイ、ジョウビタキ、シメ、マヒワ、ベニマシコ、イスカ、アトリ、カシラダカ、タヒバリ、コムシクイ、シロハラ、ツグミ、ハヤブサ、ケアシノリス、コガモ、オシドリ、(シマアジの記録あり)、キレンジャク、ヒレンジャク、稀にセグロカモメとユリカモメ、以上 78 種を記録。

イ. 竹内 功、10号 1960.3「随想」

オオアカゲラの観察の他、ツツドリ、ハクセキレイ、エゾビタキ、コサメビタキ、キクイタダキ、コガモを挙げる。

竹内功先生は当地方の鳥研究の魁(さきがけ)で、明倫中学、新制明和高校の教諭を勤めた後、市教委に転じた。今も現役の小笠原昭夫氏、杉浦邦彦氏を始め輩出した鳥研究者の師匠である。動植物同好者は地元にはける研究史にも関心を抱くようになるものである。当地方の鳥愛好者を自認する人々にとっては、故竹内先生の偉名を知っていて然るべきである。

ウ. 鳥類班、20号、1972.3「名城堀のカモ」

マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ。その他稀種アメリカコガモとシマアジの飛来記録ありとしている。

4. むすび

明和高校生物部誌と高崎個人の資料に基づき、戦後の名古屋城とその周囲の記録を思い出と共に簡略にまとめた。ここ1・2年の市主催調査のデーターと照し合せ考察されたい。

本報告はローカルのもので、他県の会員の方々には余り関心が持てないのではないかと思われるが、城の濠と言う特殊な環境について、2010年のCOP10との関連も考慮しつつ作成したものである。

プランクトン班の人達は、やや気負い乍ら強力なリーダーの下大いに活動した。その経験は勉

学やその後の生き様に資するところ大なるものがあつたに違いない。然し、その活動は生物クラブとしての人間関係を含むほんのりとした雰囲気缺乏しく、むしろ一過性の「在学中の学習」的色彩が強く、卒後永続的にプランクトンを始めとする生き物と付き合い続けた人は居ないと思われる。脇田先生は卒業後も博物学的生物研究を続けている若干名が集まる場を設けて下さるなど配慮を惜しまれなかつた。今も動植物を生涯の友としているのは、植物、鳥、昆虫の仲間であつた人達である。

4. 謝辞

文献について御配慮頂いた浜島繁隆氏と手書き原稿の電脳化をお願いした土山ふみ氏に深謝する次第である。

5. 文献

- 1) 愛知県(1983) : 昭和 57 年度自然環境保全基礎調査・昆虫分布調査報告書(調書)、114pp、愛知県
- 2) 中部河川研究会(1983) : 名古屋城外堀生物調査報告書、59pp、中部河川研究会
- 3) 浜島繁隆(1996) : 名古屋城外堀の水生植物の変遷、ため池の自然、**24**、4-5
- 4) 服部鉦太郎(1995) : 特別史蹟名古屋城いまむかし、157pp、名古屋
- 5) 明和高校生物部. 双葉、No. 1(1950)・No. 2(1952)・No. 3(1953)・No. 4(1954)・No. 10(1960)・No. 20(1972)
- 6) 高崎保郎(1954) : イトトンボが寄生するダニについて、佳香蝶、6(24)、7-10
- 7) 高崎保郎(1959) : 名古屋城の蜻蛉、Odonata、**7**、4-6
- 8) 高崎保郎(1960) : 愛知県のベニイトトンボ、佳香蝶、12(41)、24-25
- 9) 高崎保郎(1968) : 愛知県のムスジイトトンボ、佳香蝶、20(76)、101-104
- 10) 高崎保郎(1969) : アオヤンマを市街地で採る、佳香蝶、21(80)、203
- 11) 高崎保郎(2001) : 『名古屋北郊の蝶類(中野栄三)』と穂積先生、東海甲虫誌、穂積俊文博士記念論文集、358-362
- 12) 高崎保郎(2003) : 愛知県のベニイトトンボ (第2報)、ため池の自然、**38**、1-8
- 13) 魚住泰弘(1967) : 名古屋市中区でオナガアゲハを目撃、佳香蝶、19(71)、119